

3. リハビリテーションの重要性

退院や復職は8割程度の改善で行われることが多い。残りは社会生活や職業生活の中でのリハビリテーションによったほうが効率的であるためだが、その間も注意深い観察が必要である。

文献

- 1) American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. 4th ed, DSM-IV, Washington DC, 1994
- 2) 広瀬徹也: 抑うつ症候群, 金剛出版, 1986
- 3) US Department of Health and Human Services: Depression in Primary Care, AHCPR Publication, 1993

書評

Charles R Scriver, Arthur L Beaudet, William S Sly, David Valle 著

The Metabolic and Molecular Bases of Inherited Disease, 7th ed

繁田 幸男(滋賀医科大学名誉教授)

“The Metabolic Basis of Inherited Disease” 6版が、今回表題に“Molecular Basis”という言葉が入り、改訂された。本書では、特に遺伝性疾患の分子異常が強調されている。さらに遺伝性代謝疾患の分子異常のみならず、癌など非代謝性疾患の遺伝的背景までも分子レベルで検討されていることが、これまでと大きく異なっている。それに伴い、34の新しいトピックスが追加されている。第6版は1989年に出され、2巻の分冊であったものが、6年後の本版では3巻の分冊となり、ページ数もこれまでの3,006ページから600ページ増加し、参考論文も新しく、1994年のものも引用されている。

内容に関して目立った点は、Part 1の前に50ページにわたって遺伝性疾患の遺伝様式、頻度、遺伝子座、遺伝異常が表にまとめられ、極めて分かりやすくなっている。さらにPart 1は大幅に改訂され、特に遺伝子組み替えを用いた遺伝子解析の戦略および遺伝子治療の可能性が概説されている。さらに圧巻は、ヒト遺伝子の遺伝子地図が110ページにわたって収録されていることであり、第6版に比べ約2倍の量となっている。さらに“human genome project”, “genetic imprinting”など新しい項を加え、さらにoncogenesの項は“癌と遺伝”の表題で新しくPart 2にまとめられている。

筆者の専門である糖尿病に関しても、内容が23ページから54ページに増加し、最近のインスリン受容体異常を含む遺伝子異常による糖尿病、最近のインスリン分泌、インスリン作用機構、IDDM発症機構などが分かりやすく図解されている。さらに第22章

に家族性プロインスリン血症を含む異常インスリンによる糖尿病がまとめられている。高脂血症に関する遺伝子異常に関しては、Lp(a)が新しく付け加えられ、内容も豊富となっている。その他の分野でも内容が充実していて、ミトコンドリア遺伝子異常、リソゾーム酵素に関係する項目も大幅に増加し、筋疾患に関しては、X染色体関連筋ジストロフィー以外に新しく筋緊張性ジストロフィーや肥大型心筋症が取り上げられ、またプリオン病の項も取り上げられ、さらに最後の部分にはKallmann症候群、脊髄小脳変性症、Charcot-Marie-Tooth病など、新しい遺伝子解析手段を用いて、最近急速に解明されてきた遺伝性疾患についてまとめられている。

このように、本書はこれまでも遺伝性代謝疾患の聖書であったが、改訂版ではさらに多くの環境因子が関与すると思われた疾患の遺伝的背景の解析まで対象が広がり、内容も飛躍的に増加している。これら種々の遺伝性疾患に関連する遺伝子地図を眺めて、その情報量が急速に拡大することを見るにつけても、今後遺伝子診断や遺伝子治療が、そう遠くない時期に現実の臨床に飛躍的に導入されることは、疑いのない事実であるという感を強くした。なにぶん大冊であるので持ち運びは大変だが、座右に本書を備えておくことは、遺伝性代謝疾患や諸疾患の遺伝子解析に関心のある医師や研究者にとって大変便利な存在であるといえる。

(in 3 vols, 4,624pp, 1,500 figs, 1995年, 39,800円
McGraw-Hill, Inc, New York)